

巻頭言

帰国生徒教育の持つ創造性

井嶋 悠
千里国際学園

学校教育が一人一人にそれぞれの可能性とそれぞれの存在が意味を持っていることに気づかしめる、意図された営為とするならば、帰国生徒教育はその原像とも言える。自己以外はすべて異文化であって、海外体験の有無とは関わりなくそれたれの個は唯一絶対の個である。しかし帰国生徒の異文化社会での出会いと葛藤は、強い具体性をもって私達に教育の再考を迫る。

現在「学力の低下」が嘆かれている。仮に学力の低下が事実だとすれば、現在の小学校から大学までの教育の質すべてが低下の要因と言うことになるであろう。高校の義務教育化が検討され、大学はますます大衆化し、人生80年時代での生涯教育が言われている今日、従来の学力観を懐疑し、あらためて各学校教育段階での基礎・基本の徹底を主旨とした《教育の質》について考える好機ではないか。その前提として小学校から大学までの教育は「動機づけ」の場で十分だと思う。現在の教育は、情報の氾濫と相俟って、統合も総合もない知識の山積みのような気がしてならない。知識は知恵まで高められて初めて力”となる。

すでにされている提案ではあるか、現在の中学校と高等学校を一つにした義務教育機関としてはどうか。現在の中学校を前期中等教育機関とし、ゆとりをもった基礎・基本徹底の時期とし、現在の高等学校は後期中等教育機関とすることで、広範な選択講座を設定し、自由で、創造的な学習時間とする。そして後期中等教育期間中の時間を十分に咀嚼することでこれからの人生を展望してはどうか。また大学は大学で一層の個性化を目指し、入学試験は6年間の内容と生活評価および大学の個性に応じた論述試験だけとし、入学後の2年間は大学入門教育の時期、後半の2年間は専門への導入教育期間とする。そのうえでより専門的に学問を志す者は大学院へ進めば良いのではないか。

この考えの根底にあるのは“人間が時間を使う”ことであるが、このような学校社会を構想するとき、海外・帰国生徒や外国人生徒が持っている、あるいは持ち得るはずの貴重な経験と歴史は「同化」「適応」といった一方の価値観を固定しての発想ではなく、真に「相互啓発」の原動力と機能すると同時に、学力についての、また「国際」とか「開かれた」ということへの具体的思考と実践の糧となるように思う。

やはり海外・帰国生徒教育は日本国内の教育を映し出す鏡であり、日本の教育の変革と創造を生み出すエネルギーを持っているように思う。

「帰国子女教育を考える会」がその具体的で本質的な発信の場となることを一層願う。